公益財団法人

日韓文化交流基金 NEWS

https://www.jkcf.or.jp

2021.6.30 No. 96

CONTENTS

1-3 青少年交流事業(1)
【特集】東日本大震災発生から10年
― 日韓の青年たちの「共感と涙」の交流 ―
4-5 青少年交流事業(2)
東京オリンピック・パラリンピック
韓国ホストタウンとのオンライン交流
～京都府京丹後市・山形県寒河江市～
6-7 日韓文化交流基金オンライン講演会
Aspects of Korean Culture and Society
講演要旨（第３回及び第４回）
8-9 フェロー研究紹介
共通課題に対する日韓両国の医療政策における
異なる対応
神戸大学大学院法学研究科助手　裵俊燮(ベ・ジュンソプ)
10 交流エッセイ
JKAF(Japan Korea Alumni Forum)
訪韓団OBOG組織　活動報告
11 助成事業紹介
「コロナ」に負けるな ―各団体の取り組み―(その2)
12 フェローシップ・助成
2021年度訪日・訪韓フェローシップ採用者決定
2021年度助成事業決定
事業報告
青少年交流事業／広報事業／理事会開催

特集 東日本大震災発生から10年

―日韓の青年たちの「共感と涙」の交流―

東北地方を中心に甚大な被害をもたらした東日本大震災（2011年）の発生から、今年で10年を迎えました。当基金ではこの10年間、被災地復興支援や復興状況の理解促進のため、さまざまな形で交流事業を展開しており、その参加者の総数は17,000名に上ります。これらの事業の中には、韓国の大学生・教員との交流プログラムをはじめ、福島県を拠点に日韓の市民交流に取り組むNPO法人「ふくかんねっと」の事業等、日韓のメディアに広く取り上げられ、大きな反響を呼んだ事業もありました。

また、韓国での防災意識の高まりを受け、「防災」をテーマとした訪日プログラムも数多く実施しています。参加者たちは「今まで地震被害が少なかった韓国でも大地震が起きる可能性があり、日本の対策を学び、防災意識を高めたい」と積極的にプログラムに取り組み（下の写真）、被災地の人々と交流し、帰国後にはそうした体験をSNSなどで発信する活動を行ってきました。

次ページでは、今年4月10日に行われたオンライン訪日団で、韓国の社会人・大学生・高校生を対象に、被災地を訪問した経験や福島の魅力について発表を行った日韓の学生の感想をご紹介します。

地元の保育園児と歌で交流
（岩手県宮古市）

ホタテ養殖場を視察
（宮城県本吉郡南三陸町）

福島再生可能エネルギー研究所訪問
（福島県郡山市）

日韓大学生による復興ボランティア活動
（岩手県陸前高田市）

公益財団法人 日韓文化交流基金
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 プライム水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 fax. 03-6261-6780

2019年度大学生訪日団参加者で、訪日団OBOG組織「KJAF」の中心メンバーである金龍會（キム・ヨンフェ）さん、李先泳（イ・ソニョン）さん、崔昇鉉（チェ・スンヒョン）さんの3名が自身の訪日団での経験、特に被災地を訪問して感じたことや被災地への思いについて発表しました。

当誌でも過去、特集紹介しましたが、2019年7月に実施した「韓国青年訪日団（第1団）」では、主に宮城県・岩手県内の被災地を訪問しました。帰国後、団員だった金龍會（キム・ヨンフェ）さんを中心に記録ガイドブック「東日本大震災・その日の記憶」とイラストステッカーを製作したほか、「KJAF」を結成し、さまざまな活動を行っています。

KJAF（Korea Japan Alumni Forum）概要

2019年7月実施の韓国青年訪日団（第1団）参加者が、訪日中、前年発足したJENESYS訪韓団同窓組織「JKAF（Japan Korea Alumni Forum）」のメンバーである日本の大学生らの活動に刺激を受け、同年8月にJENESYS訪日団同窓組織「KJAF（Korea Japan Alumni Forum）」を結成。以降、双方の組織は交流活動などで連携し、今後益々の発展が期待されます。

発表を終えて

金龍會（キム・ヨンフェ）さん　KJAF会長

東日本大震災をテーマとして実施された訪日団の参加者として、今まで何度か発表を担当しましたが、発表を重ねて思ったことは、ただ単に訪日団でどのような体験をしたかではなく、私たちが「何を学んだのか」について伝えたいということでした。

そして、再び発表の準備をしながら、甚大な被害を受けた現場の映像を繰り返し見たり、訪日団の記憶を1つずつ思い出したりする中で、最初は遠いことのように感じられましたが、現場に行って被災者の方々の話に耳を傾け、共感しようと努力したときに、いつの間にか自分のことのように思えて涙がこぼれたことや、被災者の方々に実際にお会いして語り合えたことに感謝しつつ、互いに親しみが深まったと感じた瞬間が数多くあったことなどを思い出しました。これはいわゆる国家や対立、政治色などのない、純粋な人と人との出会いの体験でした。

現代になって多くの国家が譲歩や寛容といった価値観を強調しているにもかかわらず、自国の利害得失を計算し、物事が前に進まない場面を私たちは何度も目撃してきました。これは永遠に解決できない難しい問題かもしれませんが、少なくとも他人に「共感」するために努力しようという気持ちがあれば、私たちが望む日韓関係の発展はもちろん、世界にも平和が訪れると思います。今回の発表では、そのようなメッセージを伝えようと心掛けました。

KJAFメンバーが東日本大震災被災地への復興支援として製作した冊子とステッカー

李先泳（イ・ソニョン）さん　KJAF副会長

JENESYSプログラムを通じて、私にとって最も貴重な経験となったのは「出会い」でした。時を経た今も、一人一人との出会いが深く印象に残り、その時感じた気持ちが、現在、私が行っている活動にも大きな影響を及ぼしています。

今回の発表では、訪日団での出会いを控えている参加者の皆さんに、この出会いの大切さを伝えたいと思いました。久しぶりに訪日団の記憶を辿りながら、あの時覚えた悲しみと感動を再び感じることができました。また質疑応答では、現在活動中のKJAFに参加し、東日本大震災に関する学びを伝える活動を継続したいという声を聞くことができたので、今後、あの感情を共有することができる新しい友人ができるということに、期待を抱いています。

崔昇鉉（チェ・スンヒョン）さん　KJAF戦略企画部長

訪日団では東日本大震災被災地を訪問し、震災当時の状況と復興の現況について学びましたが、今回の発表で、当時学んだことをどのように伝えるべきか、とても悩みました。

「共感と理解、そして縁」。断ち切ることのできない情、縁、結びつきを意味する「絆（きずな）」という言葉があります。日本を初めて訪れた小学生のときから、再び訪日した2019年まで、人との交流を通じて絆を感じ、多くのことを学びました。他人の痛みに共感し、理解し、そして絆を深める。私たちは他人に寄り添うことでその人の傷を癒し、共に歩んで行くことができると伝えたいと思いました。また、発表を聞いて下さった皆さんもそのように行動して下さることを願っています。

KJAFの活動を紹介する金龍會さん

大川小学校訪問時のエピソードを紹介する李先泳さん

2018年度大学生訪韓団参加者であり、共に福島県出身の井尻俊介さんと宮尾慶信さんが、「福島の魅力」をテーマに発表を行いました。

発表では、「食・観光・継承」の3つの視点から福島の魅力を紹介しました。「食」のパートでは名物の「円盤餃子」をはじめとするグルメや桃などの特産のフルーツを、「観光」のパートでは温泉や会津鶴ヶ城などの観光名所と四季の美しさを、「継承」のパートでは会津塗などの伝統工芸品や、震災の記憶を未来に伝える施設とその活動などについて、写真やクイズを交えながら説明しました。

また質疑応答の時間には、「戊辰戦争」や「方言」についての質問のほか、放射能に関する質問も上がりました。福島県出身者としての経験や知識をもとに質問に真摯に答える2人の様子に、韓国の学生たちは親近感を抱き、福島への関心や理解が一層深まったようでした。「コロナウイルス感染症が収まり日本を訪れることができたら、ぜひ福島を訪れ、お二人に会いたい」と感想を述べる学生もいました。

発表を終えて

井尻 俊介 さん　筑波大学　博士前期課程1年

東日本大震災から10年が経過し、韓国をはじめ世界的に福島の動向が注視されている今、福島に対して少なからずネガティブなイメージを抱く方もいるかもしれません。しかし、今回「福島の魅力」というテーマで発表することになり、今だから伝えたい地元の魅力や、今後目指すべき姿について、福島出身の自分だからこそ発信できることがあると思い、今回の発表に臨みました。

オンライン上ではあったものの、韓国の学生の方々と交流する貴重な機会を頂き、コロナ禍でも、海を越えた先で同年代の方々が真剣に他国のことに興味や問題意識を抱いて、質問してくれる姿に感銘を受けると同時に、今後もこうした交流を続けていくことの重要性を実感しました。

宮尾 慶信 さん　福島大学　4年

震災から10年が経ち、傷は癒え、福島は少しずつ復興へと前進しています。しかし、このような努力が、海外の方々に十分に伝わっていないことも事実です。そのため、今回の発表では、美しく伝統ある福島に加え、震災から立ち上がった新しい福島も伝えようと意識しました。

発表後に、韓国の学生たちから福島に関する多くの質問を頂き、また韓国の方の福島に対する関心の深さが感じられて本当に嬉しかったです。そして、新たな福島というイメージを共有し、それを人から人へ伝播させていくことが、風評被害をなくすうえで重要だと実感しました。震災経験者と海外の方々との交流の場というのは、大変貴重な機会だと思います。今回はこのような場で発表することができて良かったです。

発表を聞いた韓国の参加者たちの感想

―以前、福島の近くまで行ったことがあったので、今日、お二人の発表を聞いて、その時のことを思い出し胸が熱くなりました。福島については未だに良くない認識があるかもしれませんが、いつか一度は訪問し、発表してくれた福島の学生の方々にも是非お会いしたいと思います。

―まだ日本を訪問することはできない状況ですが、このようにオンラインで、今まで全く知らなかった福島についてたくさんのことを知ることができ、とても有意義な時間でした。

―新型コロナウイルスの影響で制限はあったものの、オンラインで日本の方々と交流できて良かったです。実は、今まで福島に対してネガティブなイメージがありましたが、今日のプログラムで発表を聞いて、そのような考えが一変しました。

参加者・司会者もまじえた質疑応答

発表を行う井尻さんと宮尾さん

東京オリンピック・パラリンピック 韓国ホストタウンとのオンライン交流
～京都府京丹後市・山形県寒河江市～

「コロナで交流は止めさせない！」

当基金では、「何があろうと交流の継続を」という思いで、コロナ禍が始まって間もない2020年４月からオンラインでの交流を開始しました。当初は、参加者同士の交流を中心に実施していましたが、「韓国の皆さんに今の日本の様子を伝えたい」と考え、夏頃からはオンラインでの現地視察も取り入れました。また、2021年は東日本大震災から10年を迎える節目の年であることから、被災地の復興状況を伝えたほか、福島県内のオンライン視察などにも意欲的に取り組んできました。

このような経緯を経て、次回の企画について考えていた際、１年延期となった東京オリンピック・パラリンピックについて思い至りました。そして、東京オリンピック・パラリンピックに関して、韓国の皆さんに伝えられるのは何だろうと考えたときに浮かんだアイディアが、韓国のホストタウンの紹介でした。

「ホストタウン」とは

ホストタウンとは、東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、グローバル化の推進や観光振興などの観点から、参加する国・地域との間でスポーツ、文化、経済などの様々な分野で交流し、地域の活性化などに取り組む地方自治体を指します。2021年３月30日現在で、ホストタウンに登録した自治体数は525、受け入れる相手国・地域数は184となっています。

このホストタウンの取り組みは過去の大会にはなかったもので、韓国のホストタウンになっている日本の地域を韓国の皆さんに紹介することを通じて、東京オリンピック・パラリンピックにより関心を持っていただくために実施したのが、韓国のホストタウンとなっている自治体へのオンライン視察でした。

この企画に参加した韓国の若者は、在韓日本大使館公報文化院のレポーター10名です。公報文化院レポーターは、同院の活動を取材し広報活動を行っており、年に１回は来日し、日本のさまざまな魅力や取り組みを取材しています。

日本側でこの企画にご協力くださったホストタウンは、京都府京丹後市と山形県寒河江市です。京丹後市はカヌー競技、寒河江市はスケートボード競技がそれぞれきっかけとなり、韓国のホストタウンに登録されています。両市のご担当者には、現地からの生中継及び各市の魅力や韓国との交流の様子をご紹介いただき、意見交換の時間には、実際に現地訪問が実現した際の再会を約束するなど、和気あいあいとしたとても雰囲気の良い交流となりました。

ホストタウン関係者の方々や交流に参加した皆さんの感想を以下に紹介します。

京丹後市オンライン視察

寒河江市オンライン視察

◇京都府京丹後市

田中屋敷 和之 さん

韓国との交流は、当時、京都府立久美浜高等学校のカヌー部の顧問であった坂東美紀先生と、韓国・瑞山市（忠清南道）にある瑞寧（ソリョン）高等学校の教諭でありカヌー選手であった朴昌圭（パク・チャンギュ）先生が、国際大会で出会ったことをきっかけに始まりました。いろいろな話をするなかで、朴先生が日本や日本の指導者への関心があることを知り、久美浜高校からも瑞寧高校へ手紙を送るなどして交流がスタートしました。

2004年「未来のトップアスリート育成事業」で朴先生の来日が実現し、朴先生の勤務校であった瑞寧高校が久美浜高校との交流を希望したことから、訪日・訪韓を交互に実施することとなりました。

具体的には、瑞寧高校のカヌー部員や生徒が来日し、学校訪問、合同トレーニング、久美浜高校のカヌー部員宅でのホームステイ、カヌー部卒業生との交流を行ったほか、韓国で

もトップクラスの競技力を誇る同校カヌー部は、沖縄県での強化合宿や、日本でのトップアスリート育成事業の参加選手との交流も行いました。また、久美浜高校のカヌー部員や生徒が訪韓した際には、合同トレーニングや学校訪問を行い、日本語選択クラスの生徒との交流、カヌー部保護者会との交流、合宿所での宿泊体験やホームステイ、文化体験を行いました。さらに瑞寧高校の日本語選択クラスの生徒との手紙による交流も実施しました。

この交流がきっかけとなり、京丹後市では2016年、ホストタウンの第一次登録で韓国のホストタウンとしての登録が認定され、その後、京丹後市長の韓国訪問や、韓国カヌー連盟会長の京丹後市訪問などの相互交流を行うことができました。それらがさらなる縁となり、今回のオンライン交流プログラムに京丹後市が参加することになりました。

このような韓国とのつながりを通して、京丹後市の子供たちは貴重な国際交流の経験を得ています。子供たちは、スポーツを通しての交流、スポーツの持つ力を、身をもって体験しています。こういった出会いを大切に、交流から広まった輪が大きく広がって欲しいと願っています。

◇山形県寒河江市

大久保 臣悟 さん

山形県のほぼ中央に位置する寒河江市（さがえし）では、1974年の韓国・安東市（慶尚北道）との姉妹都市締結後、官民一体となった交流が重ねられ、2020年東京オリンピックにおける韓国のホストタウンとして、これまでスケートボード競技の強化合宿などが行われてきました。市内には東北最大級のコンクリートパーク「寒河江スケートパーク」があり、今回から新たに正式種目となるスケートボードは、大人から子どもまで人気上昇中のスポーツです。韓国選手団が強化合宿で来日した際には、地元スケーターも参加する「さがえスケートボードフェスティバル」でのジャッジやデモンストレーションの披露、小学校でのスケートボード体験教室への参加など、親交が深められてきました。

3月6日の韓国青年訪日団へのオリエンテーションでは、寒河江市の紹介やこれまでの姉妹都市交流、ホストタウンに関する説明を行い、学生たちからはスケートパークに関する質問や特産品のさくらんぼに関する質問が多く寄せられました。寒河江市ではこれまで、さくらんぼを中心としたまちづくりが進められ、市内には道の駅「チェリーランド」など、さくらんぼの名を冠した施設が多数あるほか、「全国さくらんぼの種吹きとばし大会」「ツール・ド・さくらんぼ」などのイベントや、市イメージキャラクター（ご当地キャラ）であるさくらんぼの妖精「チェリン」などを通じて、「さくらんぼのまち」をPRしています。皆さんにはホストタウンとしての取り組みについて学んでもらうとともに、さくらんぼを含む寒河江のいいものをたくさん知っていただき、多くの方々へ発信していただければと願っています。皆さんが寒河江を満喫してもらえる日が来ることを心待ちにしております。

◇在韓日本大使館公報文化院レポーター 感想

―東京オリンピック・パラリンピックの開催については知っていても、韓国選手団のホストタウンについては正直あまり知らなかったので、今回のオンラインプログラムは大変参考になりました。コロナ禍の状況ではありますが、せっかくのご縁をこのまま終わらせることなく、是非、実際に訪日してホストタウンのこともしっかり取材し、韓国の皆さんに伝える活動をしたいです。

―新型コロナウイルスにより渡航がままならないなか、このようなプログラムを実施していただいたことに感謝します。韓国ではあまり知られていない京丹後市と寒河江市が、どのように韓国と縁を結び、ホストタウンにまでなったのか、各市のご担当者から直接お話を聞くことができ、大きな学びとなりました。

団員たちが作成した
寒河江市の韓国語広報資料

団員たちが作成した
京丹後市の韓国語広報資料

団員による京丹後市の魅力を
紹介するSNS発信

団員による寒河江市の魅力を
紹介するSNS発信

講演会

日韓文化交流基金オンライン講演会
Aspects of Korean Culture and Society 講演要旨（第３回及び第４回）

前号に続いて、４回シリーズの講演会の第３回と第４回の要旨を掲載します。

第３回
「時代を彩る韓国ドラマの変遷 ー『冬のソナタ』から『愛の不時着』まで」

講師：高橋 尚子 さん（ライター・編集者）

はじめに

2020年、『愛の不時着』『梨泰院クラス』の大ヒットにより、再び注目を集めた韓ドラ*1。コンテンツ自体の魅力にハマる人が多かったことは周知のとおり。だが、日本における韓流ブームの流れと、韓国現地の流れは大きく違っている。今回は、現地での流行と変遷に焦点を当て、「今」を作った布石を追ってみた。

*1韓ドラ：韓国ドラマの略称。

1.【1990年代】韓ドラ黎明期

ソウルオリンピック開催（1988年）を機にテレビメディアが活性化し、今の韓ドラの土台が作られた時代。例えば、幼なじみ男女のロマンスを描いた92年の『嫉妬』（トレンディドラマの走り。韓ドラ初の海外輸出作）、95年の『砂時計』（社会派ドラマの金字塔）、96年の『男女6人恋物語』（シチュエーションコメディ（シットコム）の先駆け、シットコム＝若手スターの登竜門に）、97年の『星に願いを』（元祖・韓流ブームの立役者）が代表的。『星に～』の主演俳優アン・ジェウクの紹介の際に、中国メディアが“韓流（韓国の風を意味）”という言葉を使い、流行になった。

2.【2000年代前半】第一次韓流ブーム到来

■日本での盛り上がり：

02年、FIFAワールドカップサッカー日韓共同開催、合作ドラマ『フレンズ』（MBC／TBS）が制作・放送。03年、NHKBSで『冬のソナタ』日本初放送（第一次韓流ブーム）。

■韓国での潮流：

02年、『ロマンス』（年下男子ブームの先駆け）、03年、『屋根部屋のネコ』（同棲ロマンスの成功）、『チェオクの剣』（フュージョン時代劇の幕開け）、05年『私の名前はキム・サムスン』（ヒロイン像の変化）。

儒教思想が社会の根底にあり、年上の女性との恋愛はご法度だった韓国社会が変化し始めた頃。『～サムスン』の大ヒットにより、それまでの“耐え忍び系”ヒロインから、本音を語り自分らしく生きる自立型ヒロインへと移行。

3.【2000年代後半】マンガ・ネット小説のドラマ化の加速、アイドルなど新人起用の変化

06年、『宮～Love in Palace』（マンガ原作、演技ドル*2、モデル出身俳優の起用）、08年、『イルジメ［一枝梅］』（時代劇の新ヒーロー像）、09年、『美男〈イケメン〉ですね』（アイドルブーム到来）。特に、イ・ジュンギ主演の『イルジメ』は、“主人公は歴史上の偉人”が定番だった時代劇において、名もなき庶民の英雄が主人公、しかも20代の俳優が主演を務め、時代劇の新基軸を作り、視聴者層を広げた。

*2演技ドル：演技するアイドル、即ち俳優兼アイドルのこと。

4.【2010年代前半】ケーブルTV・制作会社の台頭、ファンタジーの流行、ジャンルミックスドラマの時代へ

テーマや手法が多様化していく2010年代。その背景には、地上波より自由のきくケーブルTVの台頭がある。

例えば、10年の『シークレット・ガーデン』（ファンタジーロマンスの走り）、『トキメキ☆成均館スキャンダル』（青春時代劇×ラブコメの先駆け）、13年の『君の声が聞こえる』（ロマンス×サスペンス×法廷劇、ジャンルミックスドラマ時代へ）、12年の『応答せよ1997』（ケーブルTVの台頭）、14年の『ミセン－未生－』（ケーブルTVの台頭、職場ドラマの成功）など。これらのヒットが、今現在の韓ドラの流れを作っていく。

5.【2010年代後半】事前制作への移行、男女平等～強い女性時代、ジャンル多様化が加速

制作会社の参入により事前制作が増加。その後、半事前制作が一般的に。また、ヒロイン像は社会的に自立し、男性にも物申す強い女性が主流に。ジャンルも、恋愛要素なしのサスペンスや職業ドラマへと幅が広がった。

16年の『シグナル』（本格サスペンスの成功）、『太陽の末裔 Love Under The Sun』（完全事前制作、男女平等ドラマの走り）、17年の『魔女の法廷』（ジャンルドラマの確立、強いヒロインの台頭）、19年『椿の花咲く頃』（ヒロイン像の変化）など。

6.【2020年】ウェブドラマの跳躍、世界配信時代へ

『愛の不時着』『梨泰院クラス』のヒットは、Netflix配信だったことが大きな要因。この２本の成功により、世界ほぼ同時配信の流れが加速。一方で、kakaoTVオリジナルドラマの『都会の男女の恋愛法』（世界配信はNetfilx）のように、ウェブドラマも増加。スマホ視聴を前提にしているため、各話の時間が10～20分、話数も短い構成に。韓ドラ＝１話あたりの時間が長い、という定型が大きく変わっていく過渡期にある。

さいごに

時代時代でヒットした作品を追っていくと、世相が見え、韓国ドラマの進化の過程がよくわかる。主人公・ヒロイン像の変化、扱うテーマ・手法の変化、そういった流れを知ってドラマを観ると、より深い驚きや感動に出会えると思う。

PROFILE

高橋 尚子
（たかはし なおこ）

韓流をメインとした雑誌や書籍の編集・執筆に携わる傍ら、俳優へのインタビューや、写真集、公式ガイドブックなども手がける。TVやイベントでコメンテーターも務めている。

第４回
「BTSについての一考察
～なぜ世界を夢中にさせるのか～」

講師：桑畑 優香 さん（ライター・翻訳家）

1. 記録を生むBTS現象

「Dy-na-na-na, na-na, na-na, ayy♪」

レトロなディスコポップに乗せたBTSの「Dynamite」。リリースから半年以上が過ぎても毎日のように耳にするこの曲は、日本の小学生やお父さん世代まで、幅広い層の心をとらえている。

「Dynamite」は、韓国のアーティストとして初めてビルボードHot100で１位、第63回グラミー賞では最優秀ポップ・パフォーマンス賞（グループ／デュオ）にノミネート。もはや「BTS現象」とも呼ばれる彼らは、なぜ世界を夢中にさせるのか。理由をひも解くヒントのひとつが、リアルなストーリーを織り込んだ音楽だ。

2. グループの成長と重なる音楽

2013年にデビューしたBTSは、中小芸能事務所のBig Hitエンターテインメント（2021年３月にHYBEに社名を変更）所属で全員が地方出身という、大手事務所が席巻する韓国芸能界では異色の布陣。日本デビュー直前に韓流エンタメ雑誌「haru*hana」（東京ニュース通信社）の裏表紙（！）を飾った時は、やんちゃな少年風だった。詰め込み式教育にたいする反抗などを歌う彼らのコンセプトは「ヒップホップアイドル」。だが、既存のヒップホップ界から強い反発を受けてしまう。2015年から始まるアルバムシリーズ『青春三部作』では一転し、メロディアスなボーカルとともに、青春時代の悩みや競争社会に焦点を当て、大衆によりアピールするように。さらに『LOVE YOURSELF』シリーズ(2017－2018)では、「自分を愛すること」というメッセージを前面に打ち出す。それはまるで、逡巡してきた自らの歩みにたいする答えのようにも見えた。2018年9月、国連総会でリーダーのRMが「LOVE MYSELF」を呼びかけたスピーチは、まさにBTSの曲の世界観と彼ら自身の成長物語が重なった瞬間といえるだろう。

「haru*hana」
（東京ニュース通信社）の裏表紙

UNICEFのTwitterより

3. 世界中のファンに与えた「衝撃」

BTSを世界の表舞台に押し上げたもうひとつの要素は熱烈なファン、ARMYの存在だ。世界のARMYに取材すべく、2020年１月、ロンドンで開催されたBTS学会を訪れた。アメリカからの参加者は「欧米のスーパースターと違い、弱さをさらけ出す人間らしさが魅力的」と言い、メキシコからきた大学生は「髭がなく美しい男性像に衝撃を受けた」と明かす。南米や東欧では、日本のアニメやマンガファンがYouTubeの「おすすめ動画」でK-POPを偶然目にして、パワフルなダンスや音楽に惹かれていくパターンも多い（ハンガリーのK-POPファンの76.3%は日本のカルチャーのファンというデータも）という証言もあった。

4. 国境を越えて届くメッセージ

もうひとつ、世界のARMYの事例として紹介したいのが、サウジアラビアだ。2019年10月にBTSが公演を行ったキング・ファハド国際スタジアムは、２年前まで宗教的な慣習によって女子禁制となっていた。その場所で海外アーティストとして初の単独公演を行ったBTS。宗教も文化も異なる国の人がなぜファンになるのか。コンサートに参加した複数の人が口をそろえたのは「つらい時期に彼らの歌詞に救われた」ということだった。

21歳のサウジアラビアのファンがSNSで偶然BTSを知り、心奪われたのは2013年のことだった。BTSが韓国でデビューした年、日本で雑誌の裏表紙を飾る以前に、はるか遠い国のティーンエイジャーの心に、彼らのメッセージが届いていたというわけだ。

5. おわりに

BTSはデビューアルバム「2 COOL 4 SKOOL」の最初の曲で、こう歌う。「10代20代を代表し、気ままに僕らの話をしよう」。競争社会にたいする疑問やソフトな男性像、「自分を愛そう」というメッセージ。BTSはトレンドの音楽にのせて時代の最前線を体現することで、今を生きる人たちに共通する悩みや社会問題を可視化させる。拳を振り上げるわけでもなく、同調を呼びかけるわけでもなく、謙虚に、自然体で。そんな姿に人々は気づきを得て、強く共感するのだろう。

PROFILE

桑畑 優香
（くわはた ゆか）

早稲田大学第一文学部卒業。延世大学語学堂・ソウル大学政治学科で学ぶ。
「ニュースステーション」ディレクターを経てフリーに。ドラマ・映画のレビューや K-POP アーティストへのインタビューを中心に寄稿・翻訳を手掛ける。訳書に『BTS を読む』（柏書房）『BTS と ARMY わたしたちは連帯する』（イースト・プレス）などがある。

フェロー研究紹介

共通課題に対する日韓両国の医療政策における異なる対応

神戸大学大学院法学研究科助手　裵俊燮（ベ・ジュンソプ）

2020年度訪日フェローの裵俊燮氏の研究報告を紹介します。
（フェローシップ受給者の研究報告の詳細は、基金ウェブサイトでご紹介しています。）

1. 医療政策への関心

数年前のことである。日本人の妻が「片頭痛がするから病院に行ってくるわ」と、近所の脳神経外科クリニックへ行った。戻ってきた彼女が、「MRI撮ってもらったけど、特になんでもないって」というのを聞いて私は大変驚いた。韓国では、MRIと聞くと一体どんな重病だろうと不安になる。費用も高額で人生でMRIを撮る機会がある人は非常に少ないだろう。半面、妻は費用も薬代、初診料込みで5,000円程度だったとケロッとしていた。これをきっかけに、詳細な検査が韓国に比べ、気軽に受けられる日本の医療制度に興味を持つようになった。そして、高齢化社会で医療財源が逼迫する日韓両国において何かお互いに学び合えるものはないかと考えた次第である。本格的に両国の医療政策に関する比較研究をしようとしていた時に、研究を支えてくださったのが日韓文化交流基金であった。

2. 日韓両国の共通課題

（1）医療費の増加

日本では高齢化とともに医療費の増加が続いている。医療費増加の背景としては高齢化、医療の高度化、患者負担の見直しなどが考えられる。

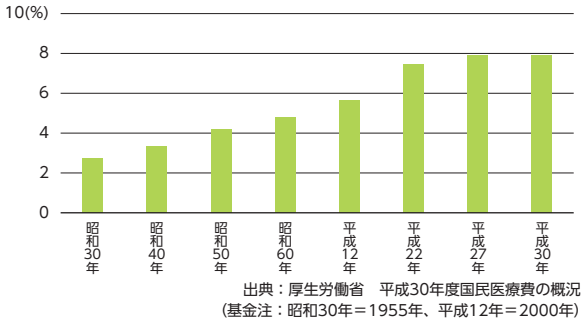


図１．日本の国民医療費の対GDP比

韓国も日本と同様に、急速に進む少子高齢化に伴い、国民医療費の急激な高まりという問題を抱えている。時系列でみると、1985年と2018年の間に、韓国の国民医療費は約２倍増加しており、国家及び健康保険財政を圧迫している。

高齢になるにつれ病気にかかる確率は高くなり、入院した際の在院日数が長くなる傾向がある。加えて慢性疾患を抱える人も多くなる。そのため、医療コストの増加に繋がる。特に日本では介護保険制度導入以前は、世界で最も多い病床数を背景に社会的入院が大きな問題となった。家庭で介護

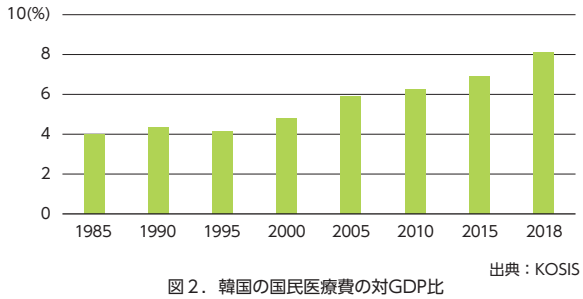


図２．韓国の国民医療費の対GDP比

サービスを提供せざるを得なかったが家族の負担が大きく、治療目的ではない介護目的のための入院が多く行われていたのである。社会的入院は、病気ではない人がベッドを長期間にわたり占有し、医療保険財源をむしばむという問題点がある。

社会的入院による医療コストの増加は、韓国でも問題になっている。韓国では老人性疾患や慢性疾患を抱える者を入院対象とする療養病院があるが、療養病院の入院患者の内10人に１人が社会的入院だという報告もある。したがって、入院治療よりも介護施設や外来診療を受けるのが適切な患者が長期間にわたって入院することにより、医療保険財政の圧迫をもたらしている。

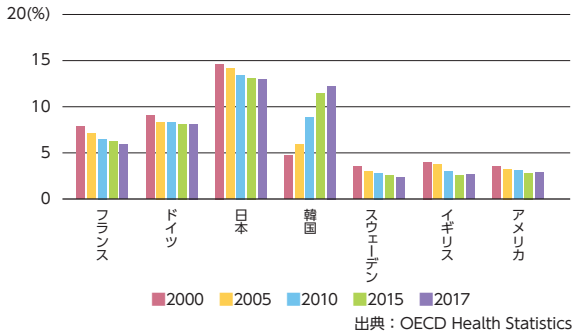


図３．主要国における人口1,000人当たりの病床数

（2）医療制度のための財源不足

少子高齢化に伴い、社会保険方式を採用している両国においては、保険料の徴収が困難になる一方で高齢者のための医療サービスのニーズは増加している。これは医療制度の持続可能性を脅かしている。

韓国は日本と同様、医療保険の財源は保険料でまかなわれるのが原則であるが、税金の投入率は保険料収入の20%にも満たない。これは、医療保険に対して半分以上の公費負担の割合を有する日本と大きく異なる点である。そのため、

韓国では医療費の増大はそれほど国家の財政に影響を与えないと言われてきた。しかし、実際には2017年には20兆ウォンを超えていた健康保険基金の積立金が、2019年には17兆7千億ウォンまで減ってきている。もし今後この基金積立金が枯渇すると、保険料を大幅に引き上げざるを得ない状況になっている。もしくは、政府が支援金を増やすことになり、さらなる税金の投入が必要となるだろう。

3. 日韓両国の制度改革の動き

日本は、1980年代以降医療保険制度をめぐる改革を本格化した。その主な特徴は（1）急増する高齢者の医療費をいかに抑制するか、（2）保険者間の公平性をどのように確保するか、（3）厳しい財政制約の中で国庫負担をどのように抑制するのかであった。政策手段としては、高齢者を対象とする独自制度の創設、保険者間財政調整などが採用され、一連の改革を通じて、高齢者及び被用者の自己負担率の引き上げ、保険者間財政調整、国庫負担率の引き下げなどが部分的に達成された。その結果、非常に高い高齢化率にもかかわらず国民医療費の対GDP比で確認する限り、医療費をある程度コントロールしていると評価できる。

一方、韓国の医療保険制度の問題として長い間指摘されてきた問題点は、医療サービスにおける政府の役割の少なさ(高い自己負担率)であった。医療保険の保障率は長い間61～ 65%台に留まっており、患者の自己負担率は33.3%とOECD平均の約1.6倍の水準である。

このような特徴のもと、高い医療費自己負担率の問題を課題として抱えている韓国政府はその解決策として、文在寅政権が2017年8月より、健康保険の保障性強化を目指し「国民が病院費の心配をしなくてよい国を作る」という目標のもと、いわゆる「文在寅ケア」を推進している。その結果、健康保険保障率は確かに上昇したものの多額の財政支出を伴っており、財源問題を深刻化させる一方である。

4. 両国の医療制度の変化

筆者は、上記で確認したような日韓両国が抱えている共通課題に対して、日韓両国の政策対応における違いを規定する要因となっている医療制度の形成過程について一次資料や、詳細な歴史的記述が行われている二次資料を参考に、政治過程を再構成している。

日本の医療制度形成期の歴史から明らかになったことは、日本の場合明治時代に現行制度の大枠がすでに決まっていたこと及び、戦争遂行のための制度形成がその後に意図しなかった形で医療制度をめぐる政策過程に大きい影響を与えたことである。農村対策の一環として導入された国民健康保険制度の保険者が市町村となったことで制度が細分化された上に、医療制度の拡大・拡充期において、高齢者を政策対象とする政策が急速に導入されたことを通じて、日本の医療制度の改革の方向性は大きく制約されることとなった。つまり、高齢者の医療費をどのように抑制するのかをめぐって細分化されている制度間の財政調整を通じて対応してきたのである。

一方、韓国の場合、経済的条件が十分に整っていない段階において独裁政権によって導入された医療制度は、政府の役割を最小化することに焦点が当てられた。したがって、民主化後、左派政権によって主導された医療制度の拡大・拡充の動きは、健康保険の保障性を強化する動きを伴うこととなった。日本の制度が高齢者を中心に発展・変容してきたことに対して、韓国の場合は高齢者に対する特別措置が全く存在しておらず、最小限の制度のみが導入されたことが特徴的である。

一般的に日韓両国の制度は類似していると認識される傾向が強いが、福祉制度の基盤形成期から制度の拡大・拡充期の歴史を見た場合、制度形成の歴史には大きな違いが目立つ。両国ともに少子高齢化という問題を抱えてはいるものの、医療制度に関しては、日本は縮小の道、韓国は拡大の道しか残っていなかったと言える。

5. 示唆点

日韓両国は、お互いの経験から多くのことを学ぶことができる。例えば、日本国内における医療政策をめぐる議論のほとんどは参考事例として欧米先進諸国を参照する傾向が非常に強い。しかし、少子高齢化の急速な進展や、過去のような経済成長が見込めない現状の中で日本に残されている選択肢は、「負担増」もしくは「給付減」の道しかなく、経済成長を前提とした「給付拡大」や「負担減」はもはや期待できない状況である。このような状況の中で、韓国の経験は、今後の「低負担・低給付」の社会保障制度設計の参考モデルとしての意義を持つ。また、韓国では近年急速に医療制度の拡充が行われているが、今後日本より早いスピードで高齢化が予想されている状況を鑑みると、日本が高齢化の中で試みてきた様々な努力の経験について十分に理解する必要があるだろう。

PROFILE

裵俊燮
（ベ・ジュンソブ）

1988年、韓国・安養（アニャン）生まれ。2014年文部科学省国費外国人留学生として渡日、神戸大学大学院国際協力研究科にて学ぶ。神戸大学大学院法学研究科で博士号を取得（政治学）。専門分野は、政治経済学・福祉政治。東アジア地域を中心とする後発福祉国家の政治学的分析を行っている。韓国中央選挙管理委員会選挙研修院海外研究官、及び内閣府青少年親善交流事業日韓通訳として活動。現在は、神戸大学大学院法学研究科助手を務める。

JKAF（Japan Korea Alumni Forum）訪韓団OBOG組織　活動報告

JKAF（Japan Korea Alumni Forum）について

JKAF会長（社会人）
渡辺 一花 さん

（1）概要

JKAFは、公益財団法人日韓文化交流基金が主催する大学生訪韓団参加者を対象として、訪韓団の経験を社会に還元し、団を越えたネットワークづくりの場を提供することを目的に2019年の1月に結成されたOBOG組織です。主な活動として、訪韓団の報告会や交流会、日韓関係に関する勉強会の実施、日韓交流おまつりのブースの運営や韓国からの訪日団のフィールドワークプログラムの計画立案などを行っています。これからも日韓友好のために私たちができることを実行し、発信していきたいと思います。今後も私たちの活動を皆様に注目していただければ幸いです。

（2）JKAFインスタグラム（Instagram）

JKAFにはオフィシャルインスタグラムがあります。リアルタイムで韓国に派遣されている団員に訪韓中の様子を投稿してもらい、見ている方に韓国をより身近に感じていただくこと、また訪韓団OBOGには自分の団との違いや、訪韓団への思いをあらためて感じていただくことを目的にアカウントを開設しました。現在は新型コロナウイルス感染症の影響で、オフラインでの韓国派遣が行われていないため、実行委員が週に1度、韓国の情報を日本語で、日本の情報を韓国語で投稿しています。毎月コンテンツの内容が違うため、皆様にも楽しんでいただけると思います。

ぜひJKAFオフィシャルインスタグラムをのぞいて見てください。JKAFインスタグラム（Instagram）は、「JKAF_official」で検索ください。

韓国青年訪日団との交流会

JKAF実行委員（和歌山大学4年）
姜愛美 さん

2021年2月6日(土)に、韓国青年訪日団団員10名とJKAFメンバー23名とのオンライン交流会を実施しました。約2時間の交流会の間、JKAF活動に関する紹介とアイスブレイク、そしてグループ別交流という流れで親交を深めると同時に、日韓両国に関して個人が抱く疑問やコロナ禍における現状などを話し合いました。

特にアイスブレイクで実施したグループ別のジェスチャーゲームでは、テーマを映画・音楽・世界の地名・動物・楽器の5つに設定し、それぞれのテーマに含まれる項目について最も伝わりやすいジェスチャーを共同で考え、発表を行いました。この過程で、言葉が示すイメージについての日韓間での相違点や共通点を知ることができ、日常生活における両国の文化について理解を深める機会となりました。

今回参加したJKAFメンバーの海辺菜々美さんからは「交流会では、韓国青年訪日団のみなさんと楽しく交流できました。首都圏外からも参加でき、渡韓が困難な時期の交流会開催は本当にありがたかったです。実際にお会いできることを心から願っています！」との言葉を、また訪日団参加者の任惠允（イム・ヘユン）さんからは「コロナのため直接会うことは叶いませんでしたが、日本の方々とリアルタイムでつながり交流できた大変貴重な時間でした。お互いの日韓交流への心を分かち合ったので、将来会える日がより楽しみになりました」との言葉がありました。

新型コロナウイルス感染症の発生から1年余りが経ち、この間に10回を超える日韓オンライン交流イベントをJKAFとして開催してきました。私たちは移動制限下でも対話の機会を設け、両国間の理解の輪を絶やさず、つなげていく役割を今後も果たしていきます。

JKAFオンライン交流会を終えて一笑顔の日韓の参加者たち

「コロナ」に負けるな
ー 各団体の取り組み ー（その２）

当基金の2020年度人物交流助成対象事業は当初15件を採択しましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止や延期が相次ぎ、最終的に実施に至った事業は9件でした。

それぞれの事業は、オンラインでのプログラムに切り替えたり、内容を大幅に変更したりするなど、さまざまな試行錯誤を経て実施にこぎつけました。

前号に引き続き、コロナ禍の中で関係者が力を合わせ、交流を実現しようと取り組んだ様子をご紹介します。

「第15回日韓学生未来会議」
（日韓学生未来会議）

2021年2月20日（土）－21日（日）
オンラインにて開催

日韓学生未来会議は、毎年両国の学生たちがテーマやキーワードを選定し、意見交換を通じた相互理解増進を目的としたフォーラム形式の事業を行っています。高校生の時に「日韓高校生交流キャンプ」（一般社団法人日韓経済協会主催）への参加経験のある大学生が中心となって、韓国側との合同準備委員会が企画運営を担います。

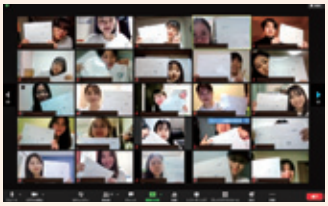
観光活性化のアイデアについて
プレゼンテーション

当初は2020年夏に沖縄に集合して実施予定でしたが、日本への渡航が困難となり、冬への延期を想定し相談を重ねたものの、コロナ禍が収まらないなか、冬期の開催も叶いませんでした。また準備期間中に予定していた日本国内合宿が実現できなかったこともあり、最終的にすべてオンラインでの開催となりました。

初めてオンライン形式で実施された2020年度の未来会議は、多くの課題に直面しました。準備委員長の田尾紗衣さんにとってはこれまでオフライン開催の経験しかなく、かつ不確定なことが多いなかで参加者同士のチームビルディングを行い、モチベーションを維持するのは容易ではなく、チャレンジの連続でした。こうしておけばもっと深い議論が出来たのではと感じることもあったといいます。田尾さんは現在韓国に留学中で、留学生活のかたわら委員長として会議開催に取り組みました。

苦労や戸惑いは絶えませんでしたが、それでも貴重な経験と田尾さんは感じているそうです。やり取りのオンライン化により、これまでそれぞれの国で行っていた事前準備を日韓合同で行うことになり、結果として例年以上に日韓の間での理解度の差を埋めることができ、参加者同士の交流の機会も増えることになったといいます。

参加者の一人、岩槻ひなのさんは「韓国も日本も同じような社会的問題を抱えているし、そのようになってしまう背景も似ていることがわかりました」といいます。また他の参加者からは、韓国側メンバーの作る発表資料はクオリティーが高く驚いたといった感想もあり、多くの刺激を受けた印象深い会議となったようです。


閉会式。日韓の参加者が修了証を
持って記念撮影。

「韓国現代戯曲　ドラマリーディングX」
（一般社団法人　日韓演劇交流センター）

2021年1月25日（月）－31日（日）
東京：「座・高円寺1」にて開催

日韓演劇交流センターは、2000年4月に日本の演劇関係7団体が参加し発足しました。2002年から日本で始まった韓国現代戯曲の翻訳・出版事業とドラマリーディングは、その後日韓での交互開催となり、そこで紹介された劇作家の作品が日韓両国でも上演されるなど、大きな成果を挙げています。2021年は節目となる10回目を迎えました。

『激情万里』

今回は、3人の韓国の劇作家の戯曲を日本側で翻訳・演出し、ドラマリーディングとして上演しました。各公演の2回目の上演後にはアフタートークを行い、最終日には「これからの日韓演劇交流」と題したシンポジウムも実施しました。

「稽古前に緊急事態宣言が発出され、公演をするかどうかをずいぶん討議しました」と語る事務局長の太田昭さん。オーディションで集まったリーディングの出演者の事情はさまざまで、やむなく参加を断念した俳優もいたとのことです。また稽古場では、過剰と思えるほどの感染症対策を行いながら稽古を重ね、財政面ではPCR検査などの追加費用もあり、予想外の出費がかさんだため、やりくりにもとても苦労されたそうです。

またアフタートークとシンポジウムには、当初韓国から劇作家らを招へいする予定でしたが、渡航制限が続いたため来日ができなくなり、韓国からオンラインでの参加となりました。

『椅子は悪くない』

これまでと全く勝手の異なる状況下で準備を進めた今回のプログラムでしたが、一方で新たな経験も得られたとのことです。これまでは公演前に劇作家と直接コンタクトをとることはなかったそうですが、今回は「Zoom」を使って稽古場からの質問を直接劇作家に聞く機会ができ、これまで以上に作品への理解を深めることにつながったといいます。日韓の演劇界を結ぶ橋渡し役としての活動が、これからも続くことを願っています。

『加害者探求 - 付録：謝罪文作成ガイド』

フェローシップ採用者・助成事業決定

1. 2021年度訪日・訪韓フェローシップ採用者決定
　2021年度訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）には42名（訪日35名、訪韓７名）の応募があり、審査の結果訪日５名、訪韓２名のフェローを決定しました。

2. 2021年度助成事業決定
　2021年度人物交流助成には25件の申請があり、この中から下表のとおり、14件への助成を決定しました。

事業名称	申請団体
デジタルネイティブ世代のハイブリッド型交流ー韓国高校生と日本大学生の学び合い	近畿大学国際学部酒匂研究室
第14回アジア国際青少年映画祭	有限責任事業組合アジア国際青少年映画祭日本
日韓文化交流事業	認定NPO法人日本車椅子レクダンス協会
宗像フェス日韓環境国際交流	宗像フェスCSR推進実行委員会
日韓青年会議 2021 サマーキャンプ	日韓青年会議
互いのことばを学ぶ中高生交流プログラム 2021 ダンスダンスダンス Online	公益財団法人国際文化フォーラム
ユネスコ音楽創意都市大邱から送る 日韓交流音楽会 ～日韓の架け橋、共に手を携え～	在韓日本女声合唱団 憩
日韓童話リーディング・オンラインワークショップ	一般社団法人フリンジシアターアソシエーション
「日韓交流おまつり 2021 in Seoul」藝〇座派遣事業	藝〇座
「日韓交流おまつり 2021 in Seoul」竜馬四重奏派遣事業	竜馬四重奏
対馬の歴史と文化と自然を知る日韓ユース・ワークショップ	朝鮮文化財ワークショップ実行委員会
第10回 東アジア音楽祭 2021in ヒロシマ<ヒロシマからのメッセージ“日韓台中の友好と創造の祭典”>	ヒロシマ・ミュージック・プロジェクト
第50回日韓技術士国際会議	公益社団法人日本技術士会 東北本部
京畿大学校学生によるサムルノリ公演と音楽交流事業	一般財団法人静岡市国際交流協会

事業報告

2020年12月から2021年３月までの実施事業を紹介します。

❶ 青少年交流事業

（JENESYS事業　すべてオンラインで実施）

●日韓大学生オンライン交流事業

「コロナ禍における日韓関係」をテーマに、日韓両国の外務省・外交部による講義や、オンラインでの日韓交流ゆかりの地視察などを実施しました。

59名 （韓国側：29名、日本側30名）	全4回	12月19日・26日、 1月16日・23日

●在韓公館選抜事業

外務省による講義、オンラインでの東日本大震災関連地域の視察等を実施。また、青年訪日団はオリンピック・パラリンピックホストタウンの視察も行いました。

韓国青年訪日団（日本文化院レポーター）

11名	全3回	2月6日、3月6日、4月10日

韓国大学生訪日団（第１～４団）

130名	全6回	2月20日、3月20日、4月10日、 5月8日、7月17日・31日

韓国高校生訪日団（第１～３団）

73名	全4回	3月13日、4月10日、5月8日、 6月12日

❷ 広報事業

6月より基金ホームページ上に青少年交流事業参加経験者へのインタビュー「わたしたちの声」を掲載しています。事業に参加したきっかけや思い出、日韓関係について思うことなど、若者たちの声を紹介していきます。

❸ 理事会開催

3月24日に第87回理事会が開催され、2021（令和3）年度予算案が承認されました。

広報誌の発行回数の変更について

当基金ではこの「公益財団法人日韓文化交流基金NEWS」を年３回発行してまいりましたが、ホームページやSNSなど、さまざまな媒体を活用した情報発信により一層力を入れ充実させていくために、次号から年２回の発行に変更します。

次号は12月下旬刊行予定です。

当基金ホームページ及びFacebook、Twitterで随時最新の情報を紹介いたしますので、併せてご覧ください。

表紙写真紹介

東日本大震災復興応援メッセージを心をこめて作成
―2013年１月　韓国青年訪日団（第１～３団）―

岩手県一関消防本部の方による震災当日の消防本部指令センター内の様子や、実際に沿岸被災地で行った救助活動などについての講義を聴講した後、団員たちは被災地の方々に向けて、折り鶴やイラストも添えた応援メッセージを作成しました。